



しなやかに強く社会課題に挑戦

読売新聞教育ネットワーク記者 小川 祐二郎

新型コロナウイルスの感染が拡大するなか、授業さえまならなかった1年。果たして、大会は成立するのかと心配していたが、蓋を開けると、全国の高校から87もの団体が応募してきた。高校生はひそやかにレジリエンス（しなやかな強さ）に磨きをかけていたのだ。

環境大臣賞の宮城県農高は東日本大震災による津波に校舎が襲われた。その科学部チームsmilesは津波被害を抑えるため、沿岸などに植える桜の新品種を開発した。メンバーは代々、増殖と植栽を繰り返してきた。震災10年目の2020年、まもなく1000本に達するという。審査では、この品種が沿岸部の塩害に強く、地球温暖化の原因となる二酸化炭素の吸収量も高いことが評価された。なにより、生徒たちの復興への思いに心が熱くなる。

環境再生保全機構理事長賞の長崎県立諫早農業高は、規格外ミカンを地元の伝統菓子の「おこし」に活用して商品化。焼却するしかなかった果皮は菌床栽培に応用した。国連大学サステイナビリティ高等研究所所長賞の富山県立滑川高はイワシを有効利用しようと、缶詰として商品にした。缶詰に使えない部分は肥料にして植林活動に使った。読売新聞社賞に輝いた愛媛県立長浜高は校内に高校として日本初となる水族館を作り、一般公開して街おこしにつなげている点が高く評価された。

青森県立むつ工業高は地中熱で融雪する試みが参加高校生による投票の結果、高校生選考賞を射止めた。長野県長野高・長野日本大学高はゲーム感覚でゴミ拾いを楽しむ手法が教師の投票で、先生選考賞を獲得した。活動の多くが実証実験を繰り返し、「ポスト・コロナ」の時代に社会実装する姿勢が伝わってくる。私たち大人の背もすっと伸びる思いだ。

読売新聞教育ネットワークのSDGs事業

高校生が挑む海洋プラスチック問題

全国ユース環境活動発表大会を後援する読売新聞社は「教育」をキーワードに高校生向け活動を展開している。医師をめざす生徒向けの医療体験プログラム、愛読書をプレゼンし合うビブリオバトル、新聞記事を使った教材「ワークシート通信」など多彩だ。

昨年は海洋プラスチック問題をテーマとした高校生の研究プログラム「海洋プラ問題を解決するのは君だ！」を8月にオンライン上でスタートした。応募した全国各地の高校生約290人から書類審査で選ばれた約100人に加え、メンター（指導役）の研究者ら約30人が参加。今年2月まで半年かけて解決策を練り上げた。

プログラムは、駒場東邦高等学校（東京・世田谷区）3年の榎澤哲さんら高校生から協力要請を受けた読売新聞社が東大気海洋研究所に呼びかけ、開催が決まった。新型コロナウイルスの感染拡大を見据え、全課程をオンラインで行った。

参加者たちは、プラスチック問題の講義のほかに、研究や情報収集、写真・動画撮影、プレゼンなどの仕方をメンターなどから学んだ。米ハワイ観光局の協力でハワイのプラスチック問題の講義を実況中継で受ける「オンライン遠足」なども楽しんだ。

テーマは、プラスチック製品の（1）代替手段（2）リサイクル手法の最適化（3）海洋環境への影響削減——の三つ。生徒たちはテーマごとに各3チームをつくって現状分析し、解決策を考え出した。中には計43回190時間をかけて討議したチームや、複数の企業に説明し、企業による社会実装実験にこぎつけたチームもあった。

今年2月には、審査と高校生たちの投票の結果、3チームが優秀チームとして選出された。3チームは横浜市で同月に開かれたSDGs関連の国際会議でも成果を発表した。



写真は、オンライン会議システムで全過程を乗り切った高校生の研究プログラム「海洋プラ問題を解決するのは君だ！」

読売新聞教育ネットワークのサイトはこちら →

